



バッハの森通信

第 144 号
2019 年
7 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

音楽を「遊び」ましょう

日常から解放された 喜びと感動を求めて

最近、田崎瑞博さんの「編曲者ノート」を、大変興味深く読みました。紹介するまでもなく、田崎さんは室内楽アンサンブル「音楽三昧」を率いて活躍なさっている音楽家です。その書き出しで田崎さんは、「演奏する」を英語で「プレイ」(play)、ドイツ語で「シュピール」(spielen)、共に「遊ぶ」を意味する言葉が「音楽する」という意味で用いられているのは、うらやましい言語文化だと思っていたが、「遊ぶ」を『広辞苑』で調べてみると「日常的な生活から心身を解放し、別天地に身をゆだねる意。神事に端を発し、それに伴う音楽・舞踏・遊樂などを含む」とあったので、「演奏」の本来の意味は「遊び」だということが分かったと語っておられました。

* * *

大いに我が意を得て『平凡社大百科事典』の「遊び」を読んでみました。「遊び」研究の諸説が紹介され、古代から近・現代に至る時代の変遷と共に「遊び」の様相が変化したことが解説されています。詳しい議論はさておき、私の理解によると、「遊び」は、自由な非日常的行動と定義できそうです。

非日常的行動に関連して、私は「安息日」を思い出しました。今から 2500 年以上も前に、ユダヤ人の先祖が、6 日間、日常的に暮らしたら、7 日目は非日常的に過ごせ、という制度を定めました。それが、ユダヤ教徒は土曜日、キリスト教徒は日曜日、イスラム教徒は金曜日を休日にする習慣となり、休日の曜日こそ違っても、今や世界中の大多数の人々が一週間に一日休むリズムで生活しています。日本人は明治時代に余り理由も考えず、欧米人の生活習慣に合わせて日曜日を休日にしたのではないのでしょうか。ともかく、大昔

から世界各地で人々は、何らかの形で非日常的時間、すなわち「遊び」が、食べるために働く暮らしとは別に必要だということを知っていたのです。

「遊び」のもう一つの定義、自由については、二つ意味があります。一つは、自由な時間、すなわち余裕のことで、現実的生活から解放されて自由に過ごす行動です。もう一つは、自由にテーマを選んで活動すること、すなわち、自発性です。そして、昔は現実的生活から解放されて余裕がある人々は、社会の一部の特権階級だけだったから、「遊び」は貴族のものであったが、近代に産業革命が起こり、平等な社会が広がると余裕ができた大衆も「遊ぶ」ようになり、現代、「遊び」は大衆化した、と説明されていました。

* * *

このような説明に異論があるわけではありませんが、こういう分析では、何で 7 日目に非日常的生活をするのか、何で余裕があったら「遊ぶ」のか、肝心のモチベーションが分かりません。「遊び」は自発的行動だというなら、それが何を目指しているか、ということこそ重要なのではないのでしょうか。

「安息日」の定めを守ったのは、貴族階級ではありませんでした。コミュニティのメンバー全員でした。当然、余裕があるから守ったものではありません。昔の人々は、「安息日」に神と、乃至、神々と交流する喜びと感動が、後の 6 日間の現実的な生活の苦しみを乗り越える力になることを経験していたのです。そして、このような神々との交流を実現するための最も重要な手段が音楽でした。

現代に生きる私たちに、昔の人たちのような神々との交流をリアルに経験することはできません。科学技術の進歩によって、昔とは違う世界観で生きているからです。それでもこの違いを乗り越えて、人間が人間として生きてゆくために、7 日目に非日常的生活である「遊び」が絶対に必要だと知った智恵と、そのための手段として発達した音楽は、重要な文化遺産だと思います。バッハの森で、私たちは、このような音楽を「遊ぶ」活動を続けてきました。皆様のご参加をお待ちしております。(石田友雄)

新しい命の誕生と育成

憐れみと慈しみを受けて

*このメディタツィオは、6月30日に開かれた「パッサの森コンサート:主の憐れみ」で朗読されました。

新約聖書に「復活祭」という言葉はありません。その代わりに「過越祭」については、最後の晩餐を初め、福音書にも使徒書にもしばしば報告されています。ただしルターは最後の晩餐を「復活祭の小羊」(Osterlamb)を食べる晩餐と翻訳しました。イエスが十字架につく前の晩餐ですから、当然、「過越の小羊」と訳すべきところです。これは、イエス・キリストの到来と共に「過越祭」は「復活祭」に変わったという彼の主張を頑固に実行した結果で、彼以外、誰も採用しません。

さてギリシャ語で過越祭を「パスカ」(Pascha)と呼びますが、語源はヘブライ語の「過越祭」(ペサハ)です。そして、ラテン語、イタリア語、スペイン語、フランス語など、ラテン系の諸言語では、同様にヘブライ語「ペサハ」を語源とする言葉が、過越祭と復活祭を同時に表します。ですから、これらの諸言語では、それが復活祭なのか過越祭なのか、文脈で判断しなければなりません。

他方、英語の「イースター」「Easter」とドイツ語の「オステルン」「Ostern」の語源は、古代ゲルマンの春の女神「Austro」に由来すると、しばしば説明されます。これは民間語源だと言う研究者もいますが、「イースター」や「オステルン」には、新しい命の誕生を祝う「春祭り」の雰囲気があります。

復活は過越の完結

このように諸外国の言葉と比較すると、日本語の「復活祭」だけが、イエス・キリストの復活、そのものずばりの名称だということが分かります。これはどういうことなのでしょう。まず、ラテン語が、同一の言葉「パスカ」で「過越祭」と「復活祭」を表すということは、初代キリスト教徒が、イエス・キリストの復活は、その千数百年前に起こった過ぎ越しの事件の続きであり、その完結であると考えていたことを示していると思います。

過越祭は、ユダヤ人の先祖が奴隷にされていたエジプトから脱出したときに、お告げに従って小羊の血を家の入り口に塗っておいたので、彼らの家だけは死神が過ぎ越したという故事に基づき、神に選ばれた民族の誕生を記念する祭りです。初代キリスト教徒は、それ以来千数百年にわたって祝い続けられてきた過越祭が、小羊の代わりに、イエス・キリストが犠牲になることによって完結したと信じたのです。すなわち、十字架につけられる前夜に、最後の晩餐で過越祭を弟子たちと共に祝ったイエスは、その翌日の十字架上の死と埋葬、その三日後の復活で過越祭を完結したという信仰です。ですから、「復活祭」という別の名称は不必要だったのです。

選民誕生の祭り

その名称から誤解されますが、死神が過ぎ越したことが過越祭のテーマではありません。過越祭の起源を伝える聖書の物語は、死神が過ぎ越した後で新しい民族が誕生して、神に選ばれたイスラエルになったことを伝えます。過越祭は選民誕生の祭りなのです。同様に、イエス・キリストの受難と復活で過越祭、すなわち「パスカ」が完結したと信じた初代キリスト教徒は、その結果、新しい選民として、「真のイスラエル」、すなわち後で教会になる「キリスト教徒の群れ」が誕生したと考えました。この信仰を継承した古代教会は、キリストの復活から7週後の聖霊降臨祭までの50日を、新しく生まれた「キリスト教徒の群れ」が、幼児から大人に成長する期間と決めました。そのことが、この間の6つの日曜日につけられた、ラテン語の名称に反映しています。

- 1) 「クワズイモドジェニティ」(Quasimodogeniti) : 「今、生まれたばかりの(乳飲み子)のように」
- 2) 「ミゼリコルディアス・ドミニ」(Misericordias Domini) : 「主の憐れみ」
- 3) 「ユビラーテ」(Jubilate) : 「喜べ」
- 4) 「カンターテ」(Cantate) : 「歌え」
- 5) 「ロガーテ」(Rogate) : 「祈れ」
- 6) 「エクサウディ」(Exaudi) : 「聞いてください」

これらの名称は、それぞれの日曜日のテーマを表しており、それなりに「キリスト教徒の群れ」の成長過程を示しているように見えますが、今は、その詳しい説明はいたしません。ただ復活祭後の最初の日曜日の

名称である「今、生まれたばかりの（乳飲み子）のように」が、まさに新しい命の誕生を示唆していることは明らかです。今日のコンサートでは、その次の日曜日：「主の憐れみ」（ミゼリコルディアス・ドミニ）のために指定されている使徒書と福音書を朗読し、その音楽的解説としてバッハが作曲したカンタータ「主は私の誠実な羊飼い」（BWV 112）を演奏します。

「憐れみ」と「慈しみ」と「恵み」

復活祭後2番目の日曜日の名称である「主の憐れみ」（ミゼリコルディアス・ドミニ）は、詩篇 89 篇 2 節「主の憐れみを永遠（トコエ）に私は歌いましょう」に由来します。ただしルターはこの“Misericordia”を“Gnade”「恵み」と訳し、詩篇 33 篇 5 節では、“Güte”「慈しみ」と翻訳します。原文のヘブライ語はどちらも同じ言葉「ヘセド」“Hesed”ですから、「憐れみ」と「慈しみ」と「恵み」が、それぞれ固有の意味を持ちつつ、同義語として用いられていることが分かります。

このカンタータは、詩篇 23 篇「主は私の羊飼いです。私に欠けるものは何もありません」に基づいて作詞されたコラール全 5 節を、そのまま歌詞にした音楽です。詩篇 23 篇は、最初、羊の立場から羊飼い（主）が、羊（私）を、牧草の茂った牧場で守り、清い水辺に連れて行って飲み水を与え、恐ろしい谷間を通るときも、いつも一緒にいて守ってくださるから、何一つ心配することはないと語ります。

羊は最古の時代から家畜として人間に飼われた動物で、歴史時代にはもう野生の羊はいませんでした。ですから、牧草も飲み水も、すべて羊飼いから与えられ、どこに行くにも羊飼いに連れて行ってもらわなければ生きていけない動物なのです。ところで、考えてみると、私たち人間も羊と同じように、生まれてから何年も子どものときは、親か親代わりの誰かに守られなければ成人することができません。それにもかかわらず、大人になると、子どものときに親に育ててもらったことをすっかり忘れてしまうのです。そのように、人は神から全てを与えられなければ生きていけない生物なのに、そのことを忘れてしまうと、この詩篇は論じているようです。

誠実な羊飼い

この詩篇に基づいて作詞されたコラールは、最初の 3 節で羊飼いと羊のたとえを歌いますが、いろいろ解説を付け加えて状況を説明します。例えば、生い茂った牧草は「救いに有効な神の御言葉」、清い水辺の水

は「勇気づける聖霊」、彷徨（サヨ）う暗い谷間は「迫害、悩み、世の悪意」などです。そして最後の 2 節で、神が整えてくださった宴席を語る詩篇の言葉を、コラールは「あなたの霊、喜びの油を私の頭に注ぎ、霊の喜びを私の魂になみなみと注いでくださる」と歌います。追加されたこれらの言葉は、詩篇のたとえを具体化して、読者の理解を助けてくれますが、最も重要な追加は、初行にあります。すなわち、「主は私の羊飼いです」という詩篇の語り始めを、コラールは「主は私の誠実な羊飼いです」と歌い、「誠実な」（getreuer）という言葉をつけ加えます。

この追加された言葉から、この日の福音書を思い出してください。すなわち、イエスが言いました。「私は善い羊飼いである。善い羊飼いは羊のために自分の命を捨てる」。こうして、詩篇が語る「主」はイエス・キリストであることを明らかにします。それにしても、羊飼いが羊のために自分の命を捨てることは、この世の常識である「自分の利益ファースト」の原則からすると、あってはならない行動です。しかし、実はこれは、すべての新しい命は、他の命の死によって準備されて生まれ生きることができると、という自然の摂理に基づく行動に他ならないのです。

先程ヘブライ語の「ヘセド」が「憐れみ」、「慈しみ」、「恵み」などに翻訳されることを指摘しました。ここでそれぞれの言葉の固有の意味と共に、誠実な羊飼いが、羊、中でも無力な小羊に、どのような姿勢で向き合っているのか考えてみます。まず「憐れむ」とは、決して上から目線の言葉ではありません。小羊の悩みを一緒に悩み、いざとなれば命をかけて守る姿勢です。「慈しむ」とは、小羊と一緒にその成長を喜び、育てていく態度です。そして憐れみも慈しみも誠実な羊飼いは「恵み」、すなわち「無償の愛」によって与えます。「主のヘセド」は、これらすべてを含む言葉なのです。

小羊の犠牲によって死神が過ぎ越し、その後で新しい民族が誕生したように、十字架で自らを犠牲にしたイエス・キリストが復活して「キリスト教徒の群れ」が生まれたと初代キリスト教徒は信じました。復活とは新しい命の誕生であり、復活それ自身が目的ではありません。目的は新しい命が生きていくことです。これから演奏するカンタータに、命の連鎖の不思議にかかわる何らかの示唆を見い出していただけることを願っております。（石田友雄）

スペインのバロック音楽 イースター・オルガン・コンサート ロレト・アラメンディ Loreto Aramendi (4月21日)

*去年9月に、スペイン、サン・セバスティアンのサンタ・マリア・デル・コロ大聖堂のオルガニスト、ロレト・アラメンディさんからメールをいただき、2019年4月26日に東京オペラシティでオルガンを演奏するので日本へ行くことになった。その前にバッハの森のアーレント・オルガンを演奏することはできないか、という問い合わせがありました。これまで、ドイツ、スイス、オーストリア、イタリア、アメリカなどの著名なオルガニストにコンサートを開いていただいたことはありますが、スペインの方は初めてなので、最初、少々戸惑いましたが、国際的に大変活躍なさっている方であることも分かり、何回もメールで話し合いながら、バッハの森としては初めてスペインのオルガン音楽のコンサートを開くことになりました。コンサートの4日前、4月17日にアラメンディさんは、ご主人のドミニク・ペラノーさん（経営コンサルタント）と2人のお嬢さん、サラ（15歳）とクラウディア（10歳）と一緒に来られ、つくばに2泊してみっちりトリハーサルをなさいました。なお2人のお嬢さんは、コンサートでオルガンの脇に立ち、譜めくりや音栓の出し入れだけではなく、小太鼓、タンバリン、鳩笛などを鳴らしてオルガン演奏に参加しました。スペインに帰国後、アラメンディさんから次のようなメールがありました。なお、コンサートの際のレクチュアの通訳などスペイン語の翻訳を唐橋文さん（中央大学教授）がしてくださいました。深く感謝いたします。

* * *

2019年5月10日

石田先生、バッハの森の皆様

私たちがバッハの森でいただいた素晴らしい一瞬一瞬に、もう一度、感謝いたします。私たちは今でも皆様のこと、オルガンのこと、それに素敵な経験について語り合っています。お約束したとおり、バッハの森のオルガンについて感想を述べさせていただきました。スペイン語で書きましたが、唐橋文さんが完全に翻訳してくださるはずで、私たちは2021年に日本に戻りたいと考えています。行く日がきまったらご連絡します。お元気で。

ロレト・アラメンディ

理想的オルガンと奏楽堂

大変幸運なことに、2019年4月に、私はバッハの森のオルガン・コンサートでアーレント・オルガンを演奏する機会に恵まれました。そしてオルガンのみならず、あのコンサート・ホールも筆舌に尽くしがたい魅惑的な場所でした。そこでの経験は、とても鮮烈で実にユニークです。あのオルガンは表情豊かで力強く、かつ詩的でした。それぞれの音栓が独自の個性的な音色を有しているのです。このオルガンの機能的構造はバロック音楽の演奏に理想的で、演奏者が要求する明瞭な音に完璧に答えてくれます。しかも優れた音響効果を持つ快いホールに設置されていて、このコンビネーションは、演奏者と音楽を楽しむ聴衆の両方にとって理想的です。

石田先生、並びにこのコンサートを企画実行してくださった方々の優しく暖かなお心遣いに、心より感謝申し上げます。この素晴らしい場所を再び訪れる機会がありますように。（ロレト・アラメンディ）



ロレト・アラメンディさん、サラとクラウディア

* * *

素晴らしい演奏で スペインの音楽を楽しみました

正直に言いますと、バッハの森にスペインのオルガニストが来て、スペインのオルガン音楽を演奏すると聞いたときは、最初、大丈夫かなあと思いました。オルガンという持ち運びができない楽器では、楽器と楽曲の間に密接な関係が必然的に生じます。バッハの森のオルガンは、17世紀後半から18世紀前半の中部ドイツの様式で作られています。スペインには独自のオ

ルガン建造とオルガン音楽の伝統があり、果たしてそういう音楽がバッハの森の楽器でうまく演奏できるだろうかと心配になったわけです。

スペインでも、他のヨーロッパ諸国同様、オルガンは「教会の楽器」でした。しかし、同じカトリック圏のフランスのような、オルガンを積極的に使ったミサ曲は作曲されず、グレゴリオ聖歌を主題にした変奏曲などが書かれました。最も重要な曲種は、「ティエント」(Tiento)と呼ばれる対位法的な、しかし自由な形式で書かれたもので、教会旋法に基づくティエントは、ミサや聖務日課の中で、当日の聖歌の旋法を聖歌隊に示すために演奏されたようです。楽器は、司教座聖堂(カテドラル)のような大きな教会を除き、たいてい1段手鍵盤に簡単なペダルがついた小規模なものですが、他の地域にはない特徴もいくつか見られます。例えば、一段の手鍵盤で旋律と伴奏を弾き分けるために、鍵盤を高音側と低音側でそれぞれ別の音色を割り当てる「分割音栓」という仕組みがしばしば備わっていました。また水平トランペット管という楽器の正面に真横に突き出したリード管があり、その管列は外観上とても目立ちますが、音も大変けたたましいものです。この勇ましいトランペット管の音色を効果的に用いた楽曲が「バターリャ」“Batalla”(戦争)と呼ばれるもので、戦いにおけるラッパの音、銃や大砲の発射音などをリード管の連打音や低音の繰り返し音型などで模写した音楽です。信じがたいことに、どうやら教会の典礼で使われたようですが、当時のスペインは、あちこちで戦争をしていて、教会は自国の勝利を祈る場でもあったのです。もっともこのような音楽が聖堂に鳴り響いたら、うっかり居眠りしていた会衆は飛び起きたでしょう。

バスク人とバスク語

今回のコンサートの途中で、パソコンを使ったレクチュアがあるとのことで、ありがちな不具合を避けるため、予め段取りを確認するよう仰せつかりました。そこで演奏者のアラメンディさんにメールを出して、どのような機材を持参されるのか等々、いろいろ質問しました。彼女からはすぐ丁寧な返事が来たので、その内容に合わせて、予備も含め、機材を準備することができました。

いただいたプログラムを見て一つ気になったのは、“Arauxo”という作曲家の読み方です。日本国内では普通この人の名はスペイン語の正書法に則り「アラウホ」と仮名書きされますが、プログラムは「アラウショ」になっていました。アラメンディさんに確認した読みだというので、ローカルな伝統なのかと思っていたのですが、謎が判明したのは、彼女がバスク人だと知ったときでした。バスク人は、スペインとフランスの国境付近に2000万人ほど住んでいる「謎の民族」で、バスク語はヨーロッパのどの言語とも似ていない系統不明な言語です。この言語では“xo”を「ショ」と読むようです。

さてコンサート当日、準備のため早めに会場に入ると、アラメンディさんご一家が奏楽堂隣のロビーで昼食をなさっている最中でした。そこで、前の晩に一生懸命覚えたバスク語の挨拶をしてみると、「大体あっているよ」と言われました(笑)。ご主人はフランス人だということで普通のフランス語でご挨拶し、2人のお嬢さんにはスペイン語を試してみましたが、反応が薄かったというか、当方の発音が下手くそで通じなかったようでした。何を言いたいかというところ、この家族はバスク語、スペイン語、フランス語で日常暮らしていて、両親は私たちと英語で会話をしているわけです。ちなみにお嬢さんたちは地元のドイツ系の学校に通っていて、ドイツ語も習っているそうです。日本では考えられない複雑な言語環境で育てられるのに驚きました。

くっきりした大きな演奏

プログラム前半は、最初にブクステフーデとJ.S.バッハという、バッハの森の楽器が本来そのために作られた楽曲が数曲演奏されました。点画がくっきりとしていて、かつ構えの大きな素晴らしい演奏でした。アラメンディさんはパリで勉強され、現在奉仕している教会の楽器もフランス近代の巨匠カヴァイエ=コル建造のオルガンとのことで、フランスのロマンティックな楽器と19世紀後半の音楽に特に親しみがある方とお見受けしました。持参配布してくださったCDもそのような音楽の録音でした。しかし、やはりバッハの直系を自認するパリ楽派の伝統を受け継いでいらっしゃるのですね。なお、うかがったところによると、彼女はスペインの古いオルガンの修復にも取り組んでおられるそうです。前半の最後は、彼女の伴奏で復活祭のコラール「キリストは死の縄目につき」の会衆斉唱をしましたが、バッハの森の恒例であるコラールの会衆斉唱は、ドイツとは全く違う伝統の教会に属すアラメンディさんにとっては、初めての経験だったそうです。

鳴り物入りのオルガン曲

後半はプロジェクターでスライドを投影しながらのレクチュアで始まりました。アラメンディさんがお住まいのサン・セバスチアンの街並みや地方特有の食べ物紹介から始まり、教会と楽器、スペインのバロック音楽へと進み、前述したようなスペインのオルガンの特徴と固有の楽曲について、丁寧な面白い紹介をしてくださいました。なおアラメンディさんはスペイン語でお話しになり、唐橋文さんがすらすらと通訳してくださいました。

後半の演奏には、何と2人のお嬢さんが参加されました。あるときは音栓の助手を務め、あるときは小太鼓や水笛などの鳴り物で音楽をもり立て、大活躍でした。当時のオルガンにはこのような音栓が備わっていたのです。あとでうかがうと、上のお嬢さんは音楽家を目指して勉強中とのことで、音栓助手もかなり手慣

れた様子でした。曲目は古典派風のソナタから始まり、ティエント、スペインらしい舞曲など、レクチュアで紹介された楽曲が続きましたが、終わりの方で珍しいフーゴ・ディストラの短い作品が数曲演奏されました。ディストラは、20世紀前半のドイツ・プロテスタント教会の音楽家で、合唱曲やオルガン曲を多数作曲しています。短く繰り返される音型の処理などが、それまで弾いていたスペインのバロック音楽に少々似ていて、なおかつドイツのオルガンの音色に適した楽曲ということで選ばれたのだと思いますが、かなりセンスのいい選曲でした。おそらくバッハの森のオルガンで、20世紀ドイツの音楽が演奏されたのは初めて

ではないでしょうか。最後は有名なカバリーニュースのバターリャ「帝国戦争」を、リード管と鳴り物を総動員してにぎやかに演奏して終わりました。

コンサート後は予想通り（笑）、大サイン会になってしまいましたが、アラメンディさんにはここにこしながら、沢山のCDやプログラムにサインしておられました。石田先生によると、ご本人はバッハの森の楽器とその活動がとても気に入られたそうで、是非また来たいとのことでした。それなら次はちょっとフランスの近代モノを弾いていただけませんか、私は秘かに期待しています。（深谷律雄）

クラヴィコードの響き 演奏とワークショップ（4月5日）

*宮本とも子さんのお話しと演奏と指導によるクラヴィコードのコンサートとワークショップが、宮治陽子さんの熱心な希望をきっかけに開かれました。

小さな素朴な 響きに魅了されて

21世紀へのメッセージ『THE PIANO』というビデオ集のBachの項で、ビヒト・アクセンフェルト女史が、西洋音楽の歴史的・精神的背景を語りつつ、「いかにしたら鍵盤楽器に話しをさせることができるか」と問いかけておられます。その中で女史は、クラヴィコードで歌うように弾けることが、鍵盤楽器の基本であるということ、3台の楽器、クラヴィコード、ピアノ、チェンバロを並べ、それぞれ演奏なさりながら語っておられました。その時のクラヴィコードの演奏には、小さい音ゆえにかえって強烈な印象を受けました。

その後、随分時を経て、たまたまひよんなことからクラヴィコードを一夏お借りすることができました。チェンバロの代わりに貸していただいたのですが、その静かな音はとても素朴で、心に触れてくるものでした。最初は、代用楽器として、やたらに指を動かして何となく弾けたような気になっていました。しかし、だんだんどうしたら多くの表現が可能なのか、何かあるはずだと思うようになり、どなたかに手ほどきしてほしいと思っておりました。

そんな時、宮本とも子先生が教会でクラヴィコードを演奏なさると知り、駆けつけました。先生の演奏を聴いてどんなに感動したことでしょうか。楽曲に吸い込まれていくようでした。そして宮本先生に教を乞い、クラヴィコードの弾き方を学びたいと思い、バッハの森で開講されている「クラヴィコード・オルガ

ン教室」で、クラヴィコードだけでも教えていただけるのか、恐る恐るうかがいました。

しかし、しかしです。想像もしていなかったことが起こりました。バッハの森の石田友雄先生と宮本とも子先生のご好意で、クラヴィコードの個人レッスンを受けるだけではなく、同時に宮本先生のレクチュアと演奏を聴き、それにワークショップのグループ・レッスンで受講生の皆様の演奏も聴く機会を作っていたのです。天にも昇る気持ちでした。レッスンでは、クラヴィコードを弾く時に大切なことを丁寧に教えて下さいました。それまで、やたらに指を動かして弾くだけで、漠然としか音を聴いていなかった自分を発見して、大変恥ずかしくなりました。

少し時間が経ち気持ちも落ち着き、先ず楽器を借りることが先決と、今は以前お借りしたクラヴィコードをまた拝借してさらっています。あれから2ヶ月余りたちますが、弾きながら思うことは、クラヴィコードの響きには余白があり、自分なりの楽曲のイメージをそこに組み込んでいけるような気がいたします。小さな素朴な音ですが、かえって凛とした気持ちにさせてくれる楽器です。

4月にあった「クラヴィコードの響き：演奏とワークショップ」に参加させていただいたことは、いささか大げさな表現かもしれませんが、私には人生最後のチャレンジになった気がしています。そうさせてくださった宮本先生をはじめ、運営のお世話をしてくださったバッハの森の皆様は心より感謝申し上げます。

（宮治陽子）



バッハの森所蔵クラヴィコード
キース・ヒル製作(2011年)

2018 年度・統 計

会員数 (2019.3.31)	入退会者数	入退会者数		
		入会	退会	増減
維持会員 82 人	維持会員 6	7	+1	
賛助会員 37 人	賛助会員 3	0	+3	
学生会員 13 人	学生会員 5	0	+5	
計 132 人	計 14	7	+7	

集会回数

参加者延べ人数 (2018. 4. 1～2019. 3. 31)

学習コース	回数	延べ人数
クワイア (混声合唱)	35	516
器楽アンサンブル	12	48
声楽アンサンブル	9	57
ハンドベル・クワイア	18	105
ハンドベル・リンガーズ	14	132
オルガン音楽研究会	15	112
コラール研究会	16	102
クラヴィコード・オルガン教室	10	25
声楽教室	2	6
オルガン・クラブ	17	53
読書会 聖書	29	150
家族向けコンサート総練習	2	26
オルガン・クラヴィコード・チェンバロ練習	177	261
クリスマス祝会	1	33
計	357	1626

公開プログラム

コラールとカンタータ	30	311
コンサート	3	159
コンサート (家族向け)	2	114
合唱ワークショップ	3	57
特別ワークショップ	1	31
オルガンワークショップ	1	15
ヴォイストレーニング入門	1	12
小計	41	699

運営活動

運営委員会	39	178
有志懇談会	1	16
評議員会	1	7
クリスマス飾り付け	2	8
草取り、外周剪定	5	12
打ち合わせ	2	7
小計	50	228

その他

フォルテピアノリサイタル	1	58
イタリアオルガン見学会	1	4
つくば市民文化音楽会 (練習含む)	4	46
来訪	1	1
小計	7	109

総計 455 回 2662 人

会計報告 (2018. 4. 1～2019. 3. 31)

経常収支

単位：千円

収入の部	
基本財産受取利息	1
特定財産受取利息	0
年会費 (維持・賛助会費)	808
事業収益	
1) 研究会 (学習コース)	2,524
2) 公開講座	126
3) コンサート	271
4) ワークショップ	30
5) 音楽教室	98
6) 楽器使用料	364
7) 賃料収益 (家賃収入)	1,217
一般寄付金	966
雑収益 (管理棟家賃、コピー代ほか)	875
計	7,280

支出の部

給与手当	748
支払報酬 (会計事務所)	165
旅費交通費	256
通信運搬費 (郵送料、電話、ネット関係)	223
什器備品費 (楽譜・書籍、エアコン)	422
消耗品費 (コピー用紙、文具他)	68
修繕費 (楽器メンテ、植栽、修繕)	621
印刷製本費 (バッハの森通信、封筒印刷)	46
光熱水料費	665
賃借費 (地代、機器リース料)	1,167
火災保険料	123
諸謝金	904
租税公課 (固定資産税、法人事業税)	363
負担金 (振込手数料)	4
雑費 (コピー使用料ほか)	267
特別会計補助 (建物維持)	1,186
計	7,228
当期経常増減額	52

指定寄付収支

単位：千円

土地地上権積立		(収入)		(支出)	
前期繰越	987				
寄付	0				
利息	0			繰越	987
計	987				987

建物維持・修理

(収入)		(支出)	
前期繰越	481	管理棟塗装	1,063
寄付	549	貸家塗装	1,123
借入金	500	モルタルブロック	57
一般会計より	1,186	繰越	273
計	2,716		2,716

オルガン修復

(収入)		(支出)	
前期繰越	150	オルガン修繕	0
寄付	55	繰越	205
計	205		205

4. 4, 11, 18 運営委員会 参加者 6, 6, 3 名。
 4. 5 クラヴィコードの響き (演奏とワークショップ)
 お話しと演奏: 22 名、ワークショップ: 14 名。
 クラヴィコード個人レッスン: 2 名。
 見学: オフィスカノン 5 名。
 4. 12 初夏/夏のシーズン開始
 4. 17 到着 ロレト・アラメンディー家 4 名。
 Loreto Aramendi, Claudia, Sarah, Dominique
 Perarnaud. 昼食会 8 名、夕食会 7 名。
 4. 21 イースター・オルガン・コンサート「スペイン
 のバロック音楽」演奏者: ロレト・アラメン
 ディと 2 人の娘、通訳: 唐橋文。参加者 48 名。
 4. 27, 28 クワイア特別練習 参加者 14, 15 名。
 5. 9, 25 運営委員会 参加者 4, 7 名。
 6. 8, 22 運営委員会 参加者 7, 5 名。
 6. 10 クラヴィコード修理 小淵晶男氏、杉本周介氏。
 6. 26 訪問 早稲田奉仕園OB・OG会 参加者 11 名。
 6. 29 バッハの森の運営を考える有志懇談会 参加者
 10 名。
 6. 30 バッハの森コンサート「主の憐れみ」 参加者
 46 名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ研究

コラールとカンタータ (JSB)

4. 13 パルマールムのカンタータ「天の王よ、歓迎いた
 します」(BWV 182); コラール「主の苦しみと痛
 みと死は」。オルガン: J. S. バッハ「イエスよ、
 あなたの御苦しみは」(BWV 159/5)、安西文子。
 参加者 9 名。
 4. 20 第 449 回、オルガン: J. G. ヴァルター「イエスの
 受難と痛みと死は」、安西文子。参加者 12 名。
 5. 11 復活祭第 3 祝日のカンタータ「私は生きる、私の
 ハート (愛しい人) よ、お前の楽しみのために」
 (BWV 145); コラール「輝くこの日を喜び楽しむ」。
 オルガン: J. S. バッハ「そこで当然、私たちも楽
 しみ」(BWV 145/5)、金谷尚美。参加者 8 名。
 5. 18 第 450 回、オルガン: J. S. バッハ「素晴らしい日
 が現れた」、金谷尚美。参加者 12 名。
 5. 25 カンタータのカンタータ「私がかなたへ行くこと
 は、お前たちに良いことなのだ」(BWV 108); コラ
 ール「父よ、汝が御霊送り出したまえ」。オル
 ガン: J. S. バッハ「神が天より与えてくださるあ
 なたの御霊」(BWV 108/6)、並木聡子。参加者
 10 名。
 6. 1 第 451 回、オルガン: J. バッヘルベル「お前たち、
 私の方に来なさいと、神の御子が語られる」、並木
 聡子。参加者 7 名。
 6. 8 聖霊降臨祭第 1 祝日のカンタータ「私を愛す者、
 彼は私の言葉を守るであろう」(BWV 59); コラ
 ール「聖霊の主、来たれ」。オルガン: J. S. バッ
 ハ「来てください、聖霊よ、主なる神よ」(BWV
 59/3)、笠間きよ子。参加者 9 名。
 6. 15 第 452 回、オルガン: D. ブクステフーデ「来てく
 ださい、聖霊よ、主なる神よ」(BuxWV 199)、笠間
 きよ子。参加者 12 名。
 6. 22 第 453 回、三位一体祭のカンタータ「誉め称えら
 れよ、主は」(BWV 129)、オルガン: S. カルグ＝
 エラート、「おお神よ、あなた、善き御神よ」安西
 文子。参加者 10 名。

学習コース

- バッハの森・クワイア (混声合唱) 4. 13/11 名、4. 20/
 13 名、4. 27/14 名 (特別練習)、4. 28/15 名 (特別
 練習)、5. 11/11 名、5. 18/12 名、5. 25/12 名、
 6. 1/14 名、6. 8/15 名、6. 15/14 名、6. 22/13 名、
 6. 29/13 名 (ゲネプロ)、6. 30/15 名 (コンサート)。
 オルガン音楽研究会 4. 19 /7 名、5. 10 /8 名、5. 24
 /8 名、6. 7 /8 名、6. 21 /9 名。
 コラール研究会 4. 12/4 名、5. 10/6 名、5. 24 /7 名、
 6. 7 /6 名、6. 21 /5 名。
 クラヴィコード・オルガン教室 4. 19/3 名、5. 24 /3 名。
 オルガン・クラブ 4. 12/3 名、4. 26/1 名、5. 17/4 名、
 5. 31/4 名、6. 14/3 名。
 ハンドベル・クワイア 5. 25/6 名、6. 8/7 名、6. 15/
 6 名。
 声楽アンサンブル 6. 1/7 名、6. 15/6 名、6. 22/7 名。
 器楽アンサンブル 5. 18/4 名、6. 15/4 名。
 読書会: 聖書 4. 13/4 名、4. 20/4 名、5. 11/4 名、
 5. 18/4 名、5. 25/5 名、6. 1/3 名、6. 8/5 名、
 6. 15/6 名、6. 22/4 名。
 ハンドベル・リンガーズ (小学生のハンドベル・クラブ)
 4. 14/7 名、5. 12/11 名、6. 16/10 名。
 チェンバロ教室 6. 7/2 名。
 オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習
 4. 2/2 名、4. 4/1 名、4. 6/2 名、4. 9/1 名、
 4. 11/2 名、4. 12/2 名、4. 13/2 名、4. 16/2 名、
 4. 17/1 名、4. 18/1 名、4. 19/2 名、4. 20/2 名、
 4. 23/1 名、4. 24/1 名、4. 27/1 名、4. 28/1 名、
 4. 30/3 名、5. 1/1 名、5. 2/1 名、5. 7/1 名、
 5. 8/2 名、5. 9/1 名、5. 10/1 名、5. 11/1 名、
 5. 14/2 名、5. 16/1 名、5. 17/2 名、5. 18/2 名、
 5. 23/2 名、5. 24/3 名、5. 25/1 名、5. 28/2 名、
 5. 29/1 名、5. 30/2 名、5. 31/2 名、6. 1/1 名、
 6. 5/1 名、6. 6/1 名、6. 7/1 名、6. 8/1 名、
 6. 10/1 名、6. 11/1 名、6. 12/1 名、6. 13/1 名、
 6. 14/1 名、6. 15/2 名、6. 18/1 名、6. 19/1 名、
 6. 20/1 名、6. 22/3 名、6. 25/2 名、6. 26/1 名、
 6. 28/1 名、6. 29/1 名。